



斬られて候

アパツチ純情

是枝の肩口から腹部にかけての直線を、刀が数センチの間をあけ、かすめていった。風切り音が鳴り、相手が振り回す剣先の軌道は止まることなく絵を描くように動いている。

一拍の間もあけず、かつぱり開いた口から断末魔の叫び声を上げ、血しぶきが吹き上がった。侍は返り血を物ともせず、次の敵にと鏢迫り合いをしている。

はたり。反り返りながら倒れた野武士役の是枝は虚空に無念を浮かべ、体から問答無用に抜ける力に抗いながらも、乾いた砂の上を転げると、握った刀を離さず事切れた風に演じた。

是枝の仰向けで倒れた体前面の着物に、血糊が本物の血液よりも鮮やかな赤に染まっている。倒れた胸は上下しない。長年斬られ役をしていると、呼吸をしながら胸が上下しない方法を心得ていた。

「お疲れ様でした」

今年で五十半ばを迎える越野が、薄目を開け極力唇を動かさぬようにして、是枝を労った。

越野は四十目前にしたあたりから、腕が上がりにくくなり、上段に構えるのに苦労している。徐々に腕が上がらなくなっていくと漠然と考えていたが、腕を上げる際に窮屈さと鋭利な痛みが始まるとあつという間に腕は上から

2
なくなつてしまった。

御歳七十を過ぎる是枝は芍薬とした姿勢で、上段に構える様は一輪挿しに刺した菊のようである。真近で拝見した越野は是枝を見習い、ジム通いを検討したが、細君に「どうせ続かないんだから、家でできる運動にしなよ」と反対されている。実際にジム費を捻出するには家計のどこかで帳尻を合わせなくてはならず、家計簿を睨む前から細君は匙を投げていたが、年々崩れていく越野の体形にも危惧を抱いていた。

細君は、一昔前は糖尿病は贅沢病と言われていたらしいが、現在では金がなければいかに健康に投資できる金がなく、糖尿病になりやすいのではないかと思っている。仕事柄、頻繁に着物を着るので恰幅はよいのにこしたことはないが、それでもこれ以上肥えると、動きが鈍くなり殺陣に迫力がなくなり仕事に支障をきたす。

翌日、細君はこじんまりした最寄の図書館で、「フジ・コトブキの最強体作り」「レッツ・パンプアップ」「中年から始める筋力トレーニング入門」「器具などいらねえ、自力負荷トレーニング」の四冊を借りてきて越野に手渡した。

「フジ・コトブキの最強体作り」は読み物としても面白く、トレーニングの図解の間に記してあった雑学や栄養学のエッセイを、越野は唐揚げを摘みながら読むという体たらくで細君を怒らせた。

越野は斬られ役では、まだ下っ端である。だからといっ

て日が浅いわけではない。かれこれ二十六年になる。越野の後に続く後輩がなかなか続かないので、いつまでたつても後輩気質が抜けず、自分でも五十で振舞う立場でないのは承知しており、情けなく思っていた。

越野はうつ伏せに横たわる前に三回斬られる役目を果たしてから、こうして倒れている。一度侍に向かつていき、景気よく斬られると「うえー」と悲鳴を上げつつカメラの後ろを回り、また素知らぬ顔をして斬りかかるのを繰り返す。

越野は役者を始める以前から、是枝には世話になっていてる。

元々は大学在学中に仲間と立ち上げた「劇団 平凡レジューム」の劇団員であり座長であった。座長に立候補する人がいなく、半ば冗談の延長線上で越野になった。

劇団は理想と予想を上回り人気を博し、大学卒業後はそのまま俳優に移行できた。

周囲が就職活動に白目を剥いて説明会、面接に明け暮れていた頃、劇団員は芝居に集中できる環境にいた。越野は就職活動など一切せず、芝居の勉強と言いつくしては映画、芝居見物に日々を労した。

卒業後の俳優家業は、月末にはひいひい苦しむくらいの稼ぎがあった。バイトをしないで済んでいるだけで満足していた。

私生活では第九回公演「猿の柄」の公演中に、第五回公演「サラエボの夜」から参加している三つ上の同劇団員と結婚してからは、共働きだったこともあり貯金はできなくても御三度に悩むことはなくなった。

夫婦となった俳優人生順風満帆を疑わなかったが、劇団立ち上げ当初から在籍する脚本家カムイが劇団を抜けてからは、腕が上がりなくなっただのと同様にあつという間に客は引き、アンケート内容も散々になった。

アンケートの辛辣さは、愚鈍な精神の持ち主の越野でも、どうにかなりそうなほどである。風呂に浸かっている時、ふとアンケートの文面が頭に浮かび、湯舟で体が硬直してしまい、細君が見つけた頃には越野体はぶよぶよにふやけることもあった。

今までの人気は在籍していた脚本家カムイの人気であったのを、脱退されてからわかった。自惚れである。劇団平凡レジュームは自分でもっているとの過信が恥ずかしくてならなかった。

越野が脚本を書くようになり、己の絶望的な文才の無さに喘ぎながら書き上げるものの、客の足は努力と冷や汗とは裏腹に、速のく一方である。劇団員は責任の所在を全て越野に向けた。

次第に劇団員の士気は下がり、一人また一人と脱退が続き、周囲の劇団からも学生劇団が潰れそうだと拍手されて、越野は癪に触ったが劇団を立て直す気力もとうに

失せており「劇団 平凡レジューム」は解散に追い込まれた。

劇団解散。それは夫婦で失業を意味している。解散直後は夫婦で自棄酒を飲み、夫婦で自棄性交に明け暮れた。無粋だが、その夜は燃えた。

抜けたカムイは、感傷に浸りもせず直ぐに新たな劇団「お嬢さん、今夜は私と踊りませんか」を旗揚げする。

お嬢さん、今夜は私と踊りませんかは、現在最もチケット入手困難な劇団にまで成長した。あまりの人気の加勢ぶりにテレビで特集を組まれ、深夜に公演の放送がされるまでになっていた。カムイの活躍は劇団だけに収まらず、ドラマ脚本まで手掛けるに至る。

越野は折に触れカムイの活躍ぶりを見聞するが、どうにも前向きに捕らえられないでいた。僻みも嫉みもある、しかし悔しいが作るものは面白い。テレビの前に夫婦そろって奥歯をキュウキュウいわしながら、ドラマを見続けている。役者に見切りをつけずに、斬られ役を始められたのも、是枝の口沿いがあつたからだ。

目先の生活の為、ハローワークに通い始め、ガードマンに就職しようとしたところ、是枝に切られ役に誘われた。

是枝と越野の接点は、カムイが是枝のファンで、一度公演に客演してもらっただけであつた。これと違って実のある話をした覚えはない。下半身の笑い話をしたくらいか。是枝の印象は、よく相槌を打ち、ほっほっほっと珍しい笑い方をする人くらいしかない。

なので誘いの一報があつたときは驚いた。「是枝です」と言われても、どの是枝さんがわからない。一拍、間を置いて頭には是枝の頬のこけた顔が浮かんだ。是枝の電話で役者としての首の皮一枚繋がりに、細君に伝えると「堅気になる好機を逃したな」などと憎まれ口を叩いていたが、二人で嬉しさを腰が砕けた。まだ役者を続けられると胸を撫で下ろした頃が懐かしい。

恩人である是枝が、この撮影を最後に役者業に終止符を打つと考えるだけで、眉間が痺れてしまう。鼻がジーンとする。「死体が身を震わせるなどしてはならぬ」是枝に、斬られ役として始めの教えに言われた言葉だ。

是枝の有終の美を、助けてもらった人間が泥を塗るなんていかん。思い出すと益々涙が込み上げてくる。是枝の引退は、越野と福富以外は知らされていなく、誰にも悟られぬように深呼吸をし涙を引っ込めた。

口の中に砂利が入り、舌の上を小石が踊る。

カメラがこちらを向いてないのを確かめて、頭を持ち上げ、是枝に一瞥をくれ、小石を噛み砕く。

シーン2

是枝の出番は終わり、用心棒役の元プロレスラー腹太鼓三世がスチロール製の金棒を振り回す。金棒をひらりと

かわした侍は、筋肉の上に脂肪の乗った体に刀を突き立てる。

腹太鼓三世はしっかりと刀を脇にはさみ、顔を歪ませ前のめりに倒れた。後は主演侍が悪代官役の福富を切り殺せば撮影は終わる。

是枝は本当に息を引き取ったように見えるほど、体を弛緩させ動かない。

福富が切り殺された子分に一瞥をくれ、青紫色した唇を震わせ言う。

「むーう、この狼藉侍めが、貴様が今切り殺した男にも家庭があるのだぞ。明日には娘の七五三に出向くのだと笑っていたわ。許せん、覚悟せい」

骨の太そうな手で刀を抜き、垂れた目蓋から上目使いに侍を睨む。

中背に筋肉質のでっぱりした体に、金の刺繍入りの派手な着物がよく栄えている。頭は大きくかつらは特注で作っていた。年を重ねるにつれ、元来の悪人顔に磨きがかかり、常に仏頂面に見られてしまうのが、福富の悩みだった。

悪代官役の福富は、是枝の古くからの役者仲間である。出会いは、互いに十代で受けた「大東ニューウエーブ」のオーディションだった。

まだ野心が服を着て歩いている二人の意気込みとは裏腹に、双方、入賞止まりで落ちている。授賞式には報道関係者が大挙して訪れ、カメラマン等は押し合いへし合いしな

8
がらシャツターを切り、二人は他の受賞者達と翌日の新聞紙を飾った。

新聞は、顔が半分に切れてたり、ピントがあつてなかつたりしていたが、せつかく新聞に載つたのだから、もう少し笑顔で写つておけばよかつたと二人とも後悔している。その時分には、まだこれから新聞をいくらでも賑わすだろうと根拠のない自信があつた。しかしそれ以降、新聞を賑わすことは勿論、載ることさえなかつた。

酒を飲めない是枝とは対照的に、福富はザルである。

ある一定まで飲めるようになると、そこからいくらでも腹に入った。酒豪になるにつれ飲めども飲めども酔いづらくなり、酔えないので酔つた振りまでしている。酔う為の酒であるので、すでに飲酒の意義は薄れているが、酒は止められない。中毒の気すらあり、アルコールなどに支配されてなるものと酒を支配するように飲んだ。

是枝に再三断酒を忠告されたが、福富は払いのけた。体を壊していいと思つているし、周りにも宣言している。医者に糖尿病を告げられた時も、そりゃそうだろうよと笑つて済ませた。

是枝は呆れ果て、でも下品な愛嬌に溢れる福富を放っておくわけにはいかず、せめてもの栄養剤を福富にあげている。

福富は是枝に貰つた栄養剤はまめに飲んでいた。錠剤の量があるので効いているかわからない。効いていたところ

で何の錠剤が効果をもたらしているのかしらない。健康に目覚めたわけではなかった。是枝に対しての義理を果たしているにすぎない。是枝がいない酒席だろうが、人伝いに栄養剤を飲んでいたと是枝の耳に入ればよいと考えていた。

半年前、福富は是枝に呼び出された。

出向いた先は、昔馴染みの定食屋だった。テーブル席が四つに、壁向かいにカウンター席が五つの小さな店である。世情は禁煙禁煙と喧しいが、この店は喫煙者にやさしく、嫌煙者が来てけむいだの言おうもんなら店外に蹴り出された。店内に一步入るだけでニコチンとタールの体の悪そうな匂いに、腹の底からほつとする。

客層はほぼ常連だけで、初見さんは古めかしい店構えだけで足踏みしてしまう。定食の品数よりも酒の趣向に寄った小鉢のほうが豊富で、下戸とのんべえが話すのにはもつてこいの店である。二人は店主とも顔馴染みで、長話になりそうだったら裏の厨房に椅子を持ち込んで飲み食いするのが通例になっている。夫婦だけで切り盛りしているからできることだ。店主も無論、会話に参加しながら調理をしていた。

店は常連でいっぱいである。常連はちびちび酒を舐め、片肘を突き、頭を沈ませながら肴を喰っていた。店の活気⁹とは別におばさんは暇そうに、レジ机に寄りかかり、喧騒

10
のなか煙草の煙をくゆらせていた。壁には店主が好きなサッカーチームのポスターが所狭しと貼られている。

福富が会釈すると、おばさんは小躍りしながら近づいてきてでっぷりとした腹を掴み「また太ったんじゃない」と気さくに話しかけてきた。

「年取ると、腹は出るのに腕や足が細くなっちゃまって、老いってのはやだねー」といい福富は麦酒腹をぽんと叩き答えてみせた。

厨房では一足先に来ていた是枝が、ステンレス製の調理台の隅で、烏龍茶を飲みながら鰯の開きを突いている。いつみても是枝の魚の食べ方は綺麗だ。順序だてて食べ進め、皿が身や骨でとっ散らかってることがない。食べ方に几帳面な性格が表れている。

店主は油で黄ばんだTシャツに太目のジーンズ姿で、足を組みながら食器棚に収まったテレビでサッカー中継に見入っている。最良のチームが降格争いの真っ最中らしい。福富も是枝も野球派なので、サッカー特有の降格争いにピンとこないでいた。

店主は、是枝と福富よりも八つ下だが、それでも還暦を過ぎている、そのわりに若い印象があった。

福富は店主に一声掛け、冷蔵庫から中瓶を取り、ふたの開いている食器洗い機から、洗い晒しのコップを取り、是枝の隣に腰を下ろす。

「サッカーを見始めると一向に喋んなくなるんだよな」

ぼやくわけではないがと前置きし、是枝は言った。

店主は本来、黙っているのが苦しい質で、人がいれば人に話し続け、人がいなければこけしでも招き猫でも構わず勝手に話す男だった。

饒舌なはずの店主は、サッカーが始まると何事かぶつぶつ呟き、何を話しかけても相手にしなくなる。

是枝は口数の多いほうではない。口下手であり、低音の声質に劣等感があつた。是枝が話し始めると周りがぐつと身構えるのが是枝には辛かつた。

変声期からは、喉まで出掛かっている冗談を又飲み込むのが癖になっている。なので口達者の話を聞いているほうが楽で楽しく、好んでお喋りを横に置いていた。そのなかでも越野はお気に入りだった。こ難しい演技論は口にせず、お堅い話題には決まって最後に下半身に結びつけるところが好きだった。愛嬌があるのも福富と似ている所がある。是枝は自身のツボの人間性があると自覚していた。

最近、二人集まると時代劇が減ってきて仕事が減ってきて参つた、と愚痴っぽくなってしまふ。大局的な流れに愚痴をこぼしても変わるものでもない。理解はしていても口にするだけで溜まっていたものが少し浄化された思いになる。口不精な分、是枝は福富よりも溜まっていたのを、福富は察していた。

愚痴を一段落させて、福富は本腰入れて酒を飲み始めた。常温の日本酒を手酌で飲む。コップに注いだ酒から気

泡が上がっていき、飲むと舌先が痺れた。¹²

話題は福富の糖尿病の病状報告があり、是枝が四国で見つけてきた栄養剤を手渡した後で、福富が小水の為便所に向かい、ベルトを締めながら戻ってくる際に是枝が言った。

「娘夫婦の家に隠居することになった」

是枝は、自分が発した言葉が他人事のように、口の端を上げ、少し笑った。

福富はいつもより一つベルトをきつく締め、席に戻った。店主は、同点で緊迫しているテレビを消し、是枝にむかって振り返る。

福富は口を酒で湿らせてから、角の取れた声色で問いかけた。

「さゆりちゃん、結婚したさきは青森だったか」

「ああ」

「寒い処じゃないか」

「ああ」

「娘夫婦と暮らすのか」

「ああ」

「役者を廃業するってことだな」

「まあ、ああ」

「そっか」

「ああ」

店主が言う。

「どっか悪いのかい」

「年だからな、そりゃ五体満足とはいかんさ」

福富はまた口を酒で湿らせた。

「俺のほうが早いと思っただがね」

福富は、体がいよいよゆうことを利かなくなり、廃業することを是枝に話す夢を幾度となくみていた。原色で色づけされた夢。夢の中で福富は、なかなか是枝に話を切り出せず、是枝がじつと一直線に見詰められながら、どうしても口が開かず悶々として、目が覚める。

この夢を見た朝は、決まって目覚めがスツキリし、頭は雨上がりの空気のように澄んでいた。

あまりに頻繁にみるので、ただの夢では納得ができず、今後に起きるだろうと確信めいたものがあり、きたるべき時にどう是枝にどう告げるか熟考してきたのだ。

告げる日には、是枝の前で格好をつけたい。悲壮感で濡れる場にはしたくないとの思いが強かった。

福富は酒を傾け電灯を見る。あつ、そうかあ。

断定した物言いは、是枝も福富にどう告げるか熟考してきたというのを気が付いた。どう反応されてもいいようにしてきたのだろうから、福富は自身の考えてきたなかで、最良の答えをした。

「そうかい。ところでよサッカーはどうしたんだ」

店主は、はっとし急いでテレビをつけると、店主が最良しやいる選手が泣いている。涙を土のついたユニフォームで拭っ

14
ていた。拭えど、拭えど、闘争心を残した顔から涙は止まらない。

店主は溜息をつき、またテレビを消そうとすると、是枝が「残れたんだから、もうちつと派手に喜べばいいのに」と言った。店主が目を細めテレビを見直す。選手は泣きながら、髪の毛の薄い南米系の監督に抱きついている。監督の光沢ある高級スーツがくしゃくしゃになっていた。監督から離れた、引き締まった体躯の男が、互いに抱擁し合う様は清々しく感じる。

「おお、残留だ。来期もJ1で戦うぞ。おい母ちゃん残留したよ、おーい、残留だ。ざん・りゅ・う。ちよ、祝杯あげよう。母ちゃん麦酒出してもいいよな。えっ、うん。まあ母ちゃんああは言ってるけど、腹心じゃあいいって言うてるよな。福ちゃんも冷蔵庫から麦酒。もうケチくせえこといわねえよ、発泡酒じゃねえ麦酒、ほらコップ持って、コレさんは烏龍茶でいいからよ」

三人でコップを合わせ、店主は是枝と福富の肩を抱き応援歌を歌いだした。福富と是枝は無理に応援歌に合わせた。

シーン3

予定ではとうに斬られているはずの福富が、なかなか斬られないでいるお陰で、侍役は困り、福富の動きに付いて

いくが、足取りがぼたついている。侍役は着慣れていない着物が重そうで、所作がそこいらの兄ちゃんとなんら変わらなくなった。

しかしまあ、酒浸りの体でよくも動けるもんだと越野は感心した。

「カット」

監督は焦れたように叫び、ベースボールキャップを地面に叩きつけ、髪を掻き筆るとフケが辺りに散り、地黒の肌に皺が刻まれる。色褪せたジージャンを羽織り直し、齢八十過ぎで足が悪いので摺足で十メートル程離れた団子屋の影まで行き、福富に手招きした。ベテラン俳優に配慮をしているらしい。福富は息が荒く、整えるのもままならず、目も虚ろである。膝につき嗚咽。粘つく唾を吐いた。その様を侍役は後ろから、蔑んだ冷えた視線を向けていた。

福富は団子屋までとぼとぼ歩き、腕組んで待ち構えた監督に説教されている。福富の恰幅のよい体躯もあり、少し離れた場所から見ると随分横柄に写る。

現場の緊張感が緩み、斬られ役が何人も倒れる中から、煮立った鍋から漏れる蒸気に似た精気が漏れる。

「この狼藉侍めがの殺陣から再開だな」

是枝は目を開き言う。顔は地面についたままだ。

「この光景も見納めですね」

「ああ。覚えてるかい、お前が好きな映画一緒に見たこと

16
があつたなあ」

「覚えていてくれましたか」

越野の好きなゾンビ映画「巨大ゾンビ対超巨大ケンタウロス」に出てくるシーンに墓からぼこぼこ出てきたゾンビが皆、地上に出てきたのに向に立ち上がろうとせず、ジャズが流れると、ゾンビがトランペットのリズムに乗りながら歌い踊るシーンを想起させた。

越野は、馬鹿馬鹿しいが絵の力強さがあり大好きなシーンの一つだった。

「よく理解できない映画だったな」

「ゾンビ映画なんて不条理だからこそ、ゾンビ映画たらしめるもんです」

「ああ」

是枝は興味もなさそうに答えた。

「あれ、前にも言いませんでしたっけか」

「ああ」

是枝は四年前の休日、目的もなしに足の向くまま歩いていると、玩具みたいな椅子が歩道直前まで並ぶカフェに、若い男女が溢れていた。湯気の立つカップを持つ男女は、どこか埃っぽい印象の人ばかりである。

マフラーを口元まで隠し、店の前で立ち止まって立て看板を読む。

「怪奇フィルム映画祭り」と手書きで書いてある。

ベニヤ板に直接ペンキで書かれた味わい深い看板はなんともいえない赴きがあった。若人は寒いなか映画を見る為に集まってきていた。俳優としては、映画好きが集まっている輪を見るだけで、胸が高鳴る。

デジタル映画全盛の時代に、フィルム映画の上映とは珍しい。パソコン一台で上映できるのは、金欠監督だったり学生には嬉しいだろうが、どうも虚しさを感じずにはいられない。感傷に浸るのは年寄りの悪い癖だと承知していても、得心できずにいた。

昨今ではとんと見られなくなっていた故に、是枝の慕情をくすぐった。

若い人ばかりのなか入っていくのは気が引けた。人の楽しみを邪魔している気になる。

甘い香水と煎ったコーヒー、活発とした体臭を嗅ぎながら店内に入り、カウンターで店主と思われる三十台そこそこの髭面の男にコーヒーを注文し、チケットを購入する。店主は湯気の上がるカップを手渡す際「是枝さんですよね」と小声で言った。

是枝は長い俳優人生で、声を掛けられることは数えるほどしかない。そのほとんどが大東ニューウェーブの新聞を見たという何十年も昔のものだ。十年一昔というくらいだから、最後に声をかけられたからの遠い昔話に聞こえる。

¹⁷ 店主は又小声で「みな噂してますよ」と言う。それとな

しに辺りを見回すと、眼が合った人が会釈をしたりする。身長の高い二十代後半とおもわれる女性は、唇を噛みながら胸の前で軽く手を振ってきた。是枝は恥ずかしくて対応に困ったが、居心地は幾分好くなった。

深いブラウンの一人掛けソファでくつろいでいると、店主がプレイヤーを持って来てくれた。店主に礼を言い目を通す。おどろおどろしいタイトルが揃っている。

「巨大ゾンビ対超巨大ケンタウロス」「ゾンビコックの残虐フルコース」「サイコパス・イン・ヴェネチア」「わくわく地獄巡り」

約十分の休憩を挟み、立て続けに上映するらしい。

上映時間が迫ると、店の外に溢れていた人が店内に納まる。店内が狭く、人との間隔が近かかったが、スクリーンに集中すればなんら問題はない。どれも上映時間は一時間半を満たない映画ばかりだが、全ては見れないだろうとは是枝は思った。明かりが消され、白い幕が張られてカタカタと映写機が回り始めると、懐かしい胸の高鳴りがある。

一本目のサイコパス・イン・ヴェネチアのタイトルが映し出されると、自然に拍手してしまった。子供じみているなんて手を止めたが、周囲も拍手したので、拍手する手を再開した。周囲に映画好きが集まっているのが知らず知らずに気が昂っていた。

ふと、越野が話していたのを思い出した。酒席で越野が

酩酊一步手前の時、黒目が沈んだり浮かんだりしながら、うわごとのように、斬られて倒れてからカットや休憩が入ると好きなゾンビ映画のワンシーンに似てるんですと言っていた。

一度席を立ち、トイレで越野にメールにて誘ってみた。直ぐに返信が来て、暇なので向かいますとのこと。

その時越野は、細君との口論が過熱して、とてもじゃないが家にいる気にはならなかった。

口論の原因は些細なもので、細君が牛乳を飲んだコップで、オレンジジュースを入れて飲んだのを、非難したのがきっかけだった。越野には、少し牛乳が残っているコップのなかにオレンジジュースを入れて、淀んだ色になっている飲み物は、もうオレンジジュースなんかではなく違う飲み物で、横で見ていると胸が悪くなるのに、それをなんら躊躇もなしに飲み干し、会話を再開させようとしている細君の気が知れなく、一言いわずにはいられなかった。故に口論が鋭くなってしまう。

細君は理由はどうでもよく口調に腹を立て言い返し、口論が展開する。

越野は逃げるように家を出た。カフェまでそう遠くはないので、自転車に跨る。

ペダルを漕いでいると、口論により火照った頭は冷やされ、途中、コンビニのベンチで細君に電話し謝っておいた。勿論、事柄にでなく口調にである。

越野はサイコ・イン・ヴェネチア終わりの休憩時間に到着した。髭面の店主にチケットとアイスコーヒーを購入し、余っている椅子を持ち是枝の横に座った。

越野が座った椅子はデザイン重視で、安定に欠ける。木製で硬く、数分座ったくらいで体を捻りたくなつた。椅子の足が床から三十センチくらい低く、膝が固まり痛くなる。

是枝に越野が一本目の感想を求めると、目頭を押さえ苦笑しながら「たくさん死んでたな」と言った。

「ほう、そりゃ楽しみだ」越野は舌なめずりをして次の上映を待つ。

是枝は席を立ち、ポップコーンを二つ買って戻ってきた。ポップコーンは市販の物で、せつかく盛り上がりつつある映画館気分が萎えてしまう。これではDVDを借りたのと変わらないではないかと、残念に思った。一つを越野に渡す。味は共にしおである。摘んで口に入れると、唾液でしゅんと萎んでいき、残るのは硬い芯の部分である。

次は、巨大ゾンビ対超巨大ケンタウロスが始まり、開始四十二分後ゾンビが踊り立ち上がるシーンには、越野は是枝を突き「ココです」と教えた。

是枝はゆっくり頷く。

まるで理解できなかったら、否定しようと考えていた是枝だが、越野が云わんとしていることは分かった。

聞きしに勝る馬鹿馬鹿しさだったが、このゾンビ役の俳

優も馬鹿らしさは承知している。承知の上で一糸乱れないダンスは、よく見れば動きは複雑で、踊りの心得のないものが一長一短でできる動きでなく、俳優陣の長い鍛錬の痕跡が垣間見える。

是枝は、刹那に消える斬られ役と、特殊メイクで顔の判別が不可能なゾンビ役の不遇さが重なって見え、自分は理解者であるとスクリーンの向こうに思いを送りたくなく、念に似たものを刷り込むようにしてスクリーンを睨んだ。

睨んでからこの映画は二十年前に封切りした物であったと思いついたが、それでもこの思いは無駄にはならないだろうと感じた。

映画のストーリーは支離滅裂である。

アイオア州に突如表れた巨大ケンタウロスに、踏み潰され死んだ人達が復讐する為ゾンビとして蘇る。しかし一人のゾンビでは到底、巨大ケンタウロスには太刀打ちできないので、ゾンビ同士結束して、重なり合いどンドン巨大化していく。目前でぶくぶく大きくなっていくゾンビを、巨大ケンタウロスだつてただ指をくわえて待っているはずがなく、ゾンビの巨大化を食い止めようと、まだ合体以前のゾンビを追い詰めては捕まえ喰らっていき、更に巨大化するといったストーリーだ。

ゾンビとケンタウロスが無制限に膨らんでいく。最後は²争いを業を煮やした天使ミカエルが、聖なる光でケンタウ

ロスもゾンビも一掃する。CG加工も一昔らしく粘土細工を少しづつ動かして撮っていた。

是枝は見終わってから、細君や友人にこの映画をどう説明したらよいものか頭を悩ませた。上手く説明できる自信がない。いっそのこと黙っておくかと半ば決めていたが、出先を問われればあの細君のことだ、その場しのぎの嘘を察して騙されてくれるはずがない。最近はパートの人間関係で気が立っているせいもあり、ひりつく追及された挙げ句、真実を話しても信じてもらえずむやくちやされるに違いない。そう考えるだけで不整脈が起こりそうだった。

越野は大きな伸びをし「ふー、この想像力の馬鹿力っぷり」とうっとりとして言う。

是枝を横目で見て感想を求めずにいられなかった。

「どうでした」

「うーん説明に困るなあ。まあ理解できないってところか」

是枝の反応に、越野は残念がることなく、むしろ嬉々として言う。

「ゾンビ映画は想像力の限界への挑戦ですよ。やりつくして、やりつくしてなお、まだ斬新なゾンビ像を提供してくる。それはもう俺の脳みそが松代までもつても追いつかない」「そういうものか」

また明かりが消え、モノクロのタイトルが管楽器の音色とともに表れる。

わくわく地獄巡り。

シーン4

是枝は撮影を終え、かつらを脱ぎ着物を脱ぎ、身軽なジャージーにキャップ姿に戻り、撮影所の門の前に立った。ポストンバックの中には記念の台本と、飲みかけのミネラルウォーター。

夕暮れを合図に街灯が点灯し、感傷を含み伸びる影。是枝の体には心地いい疲労感が溜まり、足が重い。重いのは疲労感だけか、と自問する。

何十年も役者一本でしのできたはずの最後が、こんなにも空白に過ぎ去っていくとは思わなかった。しかし、それも悪くはないと是枝は感じている。

売れないつてのは、陰惨だぜ。誰の言葉だったか、記憶を遡ってみると、堀の深い目に黒々と毛艶のいい七三分けの、第一回大東ニューウェーブの最優秀賞、鹿山の顔が浮かんでくる。

常にムスクの匂いを漂わせ、裾を切らないジーンズを履いていた。輪郭は無骨なわりに顔のパーツは女性らしい。歩くだけでも様になり、彼を一目見た女性はおもわず笑みをこぼし、しなを作った。

²³ 大東映画の低迷期、鹿山はダイナマイトダンディシリーズ

ズで人気を不動のものとした。²⁴

鹿山が出てきた時は映画人気は下降の一途を辿り、逸早くスター誕生が望まれていた。その状況下に鹿山が出てきたのは運命のめぐり合わせを思わせる。

是枝もダイナマイトダンディシリーズには何回も脇役として出演している。斬られはしないが、銃殺された挙句、ダイナマイトで木っ端微塵に吹き飛ばされた。

上映時は故郷の母がまだ健在だった。腹を痛めて生んだ息子が、襟首からダイナマイトを放り込まれ、慌てふためきながら吹き飛ばされるのを映画館で見て、白目を剥いて泡を吹き倒れてしまい、救急車で運ばれたという。直ぐに姉から電話があり、親不孝者と罵られた。

役名は一度しか貰えなかったが、その一度がシリーズの中で一番興行が良かったのが自慢だ。

クライマックスの、鹿山が上半身裸でスラックスにダイナマイト何本も刺し、両手の火のついたダイナマイト振り回しながら、敵アジトに突っ込んでいくシーンは伝説になっている。

封切り後には「火薬の臭いがしてきたぜ」と鼻をこする仕草と決め台詞を真似する人がでてきて、鹿山が歌う挿入歌「漢は闇夜で夢を語る」も大ヒットを記録。大晦日の歌番組に連続で出演している。鹿山の人気は、一種の社会現象だった。

是枝は同期だからといっても無名役者風情なので、おい

それと話し掛けられない存在であった。

しかし鹿山には是枝や福富の抱く立場の違いなど意に介さず、出自が同じといこともあり親近感をもっていた。

鹿山は人気絶頂のなか倒れる。喉頭癌だった。

始めはメディアは大仰に取り上げ、毎日テレビで病状を報じられ、自称俳優仲間という人達が言葉を詰まらせながら運命を嘆いた。

闘病が長引くにつれ、鹿山への人々の関心は薄まっていった。週刊誌には大衆の興味を引きたいが為の仮病説など中傷記事が実しやかに記述され、中傷の価値もなくなるとみると中傷さえも消えた。

鹿山が銀幕から姿を消すと、すぐさま新しいスターが登場し、繋ぎ目なく時代は進んでいく。

次第に鹿山は痩せ細り、固形物を摂取するのも苦しく、高い身長を折り曲げるようにしてベッドに寝ていた。食事を取れないのは精神的なものが大きいと、担当医師は言う。

是枝は定期的に病室に見舞いに行き、福富も出不精なくせに、よく見舞いに行っていた。

是枝が病院の個室に姿を見せると、プロレス雑誌から目を離し、ようと手を上げて見せる。

是枝は見舞いの一輪だけの花を花瓶に刺し、花の包装

に要した新聞紙を丸めた。捨てようとしたら、屑籠にカレ-

パンの袋が捨ててある。食事の取れない相手を前に、無神

経にカレーパンを喰って見せるのは福富ぐらいしかいなく、少し前に福富が居たことを知らせた。

「福富がきてたのか」

「ああ、カレーパン喰いながら一方的に捲し立てて帰っていったよ。お喋りな男は色気に欠ける、是枝あいつにそう言うっておけよ。それとこいつの礼も言うておいてくれ、言いそびれたんだ」

鹿山はプロレス雑誌をひらひら振った。羊の覆面レスラー、メリー後藤田が腹太鼓三平の挑戦を退けたと見出しが付いている。

「人気だな、メリー後藤田」

「向かう所敵なしだ。若山一輝に続いて腹太鼓三平までやられた。次は、コロラドの人間重機パトリック・ヤングらしいぜ。またやられちまうだろうな」

「ああ」

興味のなさそうな是枝の相槌に、鹿山は溜息をついた。深い掘りは窪みと称したほうが正しくなっている。

鹿山は諭すように、役者は興味の無いことなんてひとつもないんだぜ、と言った。続いて、なにが面白くて日々を過ごしてるんだ趣味かなんかないのか、と尋ねられ言葉に詰まる。

是枝は趣味という趣味が無く、楽しみにしているのは細君との温泉巡りくらいだ。それも発案は全て細君からで、先月は伊香保に行ってきた。洗練された都会的な鹿山に、

温泉巡りとはいかにも芋臭く、口にするのを憚られた。

「是枝よ、引き際ってのを考えてるかい。最近、頭にチラついて仕方ないんだ」

「考えてないと言ったら嘘になるな。でも俺たちやこれからの身分だ。どうやっていい配役につくことばかり考えているよ。鹿山よお、ひよってんじゃねえぞ」

是枝は挑発的に言い、鹿山が少しは怒るかと思いきや、呆れたように笑う。

「そんな心配してんのか。まったく馬鹿だねえ。主演する男つてのわな、不幸や失敗は自分の脇を通っていくとしか考えねえんだよ。神仏は俺の背を見てるってなもんだ。余計な心配なんかしやがんな、俺もお前も役者を志した時点で、すでにアウトローよ。手先の試行錯誤なんざ、ホワイトカラーがやるこつた。ドーンといこうぜ、ドーンとよお」

「ああ」
「しかしあれだぞ」鹿山は子供っぽい嫌味が滲んだ笑みをむける。「売れないってのは、陰惨だぜ」

鹿山の予想は大きく外れ、結句売れずじまいである。人生の大博打を打ったつもりが、波も無く平坦であった。甲斐がねえやと、笑えてくる。

鹿山は人知れず明朝に息を引き取った。弱って冗談も言えなくなると、見舞いを断るようになり、亡くなった後に棺桶をのぞいた顔はダイナマイトダンディの面影はなかつ

た。²⁸息を引き取った日は雨も降らず、雪も降らず、かといつて晴天でもない朝だった。

鹿山は生涯独身だったので、年老いた母が訃報の電話をしてきた。膨大に連絡する先があり、是枝には昼過ぎに電話がきた。

老婆は擦れた言い回しであっけらかんとしていて、察するのは鹿山の無念さよりも、老婆の疲労感のほうだった。老婆に腹を立て、葬式で面と向かって言つてやろうと意気込んで出向いたが、喪服に身を包み腰の曲がつたぐたぐびれた老婆を目の当たりにしたら、己の想像性の欠如を悔やんだ。

是枝は新聞もテレビも見る気にはならなかった。亡くなつてから手を叩いて賞賛しても、賞賛する相手はもうこの世にはおらず、空しい限りだったからだ。

「是枝さん、挨拶してかなくていいんですか」

越野が後を追ってきた。是枝の頭の中には劇団にいた頃の二十代前半の越野がいる。現在の越野は老眼鏡をかけ白髪交じりであるが、内面はゲスト出演した時と変わらない。演技論を避け、他愛もない助平話を優先させる愛らしい男だ。

是枝の数少ないファン、カムイから越野を預かってくれと頼まれた時は、正味参った。

カムイは劇団を抜けてから、劇団はおそらく持たないだろう踏んでいた。予想より早かったが、案の定、劇団平凡

レジュームは解散とあいなった。

劇団員が散り散りになったのに責任を感じたカムイは、せめて座長の越野だけでも役者業を続けていつてほしく、その手伝いをしてくれとのことだった。では、越野を新しい劇団に迎えてやれと言ったのだが、カムイはそれではできないと固辞する。勝手な奴だと困ったが、越野をこのまま放っておく気にはならなかった。カムイの名を隠しているのは、勝手な男に対してのせめてもの反抗である。

「ああ」

「なんで」

是枝は言わずらそうに頭を掻く。

「どうもな、特別な日にはしたくなかったんだ。最後を花々しくしまうと、俺の地味な俳優生活が霞んじまうんだ」

是枝はポストンバックを掛け直し、越野を残して歩き出した。重かった足が今は目的地に向かい動いていく。越野は拗ねながらも、気が向いたら打ち上げに来てください、と駄目もとで誘ってきたが、是枝は背を向けたまま手を振り断りを入れる。

「越野、売れなくても陰惨じゃないぞ」

是枝が振り返ると越野の姿はなく、すでに打ち上げ会場に向かったようだ。

まあいい。早く家に帰り、荷造りを手伝わねば、細君に叱られる。